中國の革命思想

——アヘン戰爭から新中國まで——

竹內 好・山口一郎
斎藤秋男・野原四郎 著

昭和廿八年九月 岩波書店
新書版二三〇頁 一〇〇圓

〈あとの烏がさきになる〉という言葉がある。日本が明治維新を

契機として、近代國家への第一歩をふみ出したのにくらべて、中國の近代化の足どりはまことに鈍重であった。しかし、いまでは世界史は大きな轉換をとげ、兩國の關係は逆轉した。あとの烏の中國がさきになった。素直に現實をみる人ならおそらく誰でも、このあざやかな歴史的事實を肯定するであろう。ところが、この事實をみとめることは、かっての强國日本のメンツにかゝわるとでもいうのであろうか、いっこうにみとめることを嫌い、「中共」という國があるかのごとく、全く動脈硬化的な症狀を呈している人々が、なお存在するということはこまったものだ。このような人々にはもちろんだが、「現代中國の變革の大きさ、質の深さ、世界におよぼす影響の重要さについて異論をさしはさ」まない人々でも、さて「その變革の性質はどういうものか、今日の中國にそだちつゝある文化は、これまでの歴史にあらわれた文化とどうちがうのか、そこに形成されつゝある人間は、史上のあらゆる人間類型とどうちがうのか、彼らはなにを行動原理とし、なにを理想としているか、自由の問題を彼らはどう考えているか」などについて、すぐに答えられるものはそう多くないであろう。新中國あるいはその國の近代史に關する書物の數多く見出されるなかで、とくに本書をそうした人たちをもふくめて、廣く人々によんでほしいと私はおもう。かって私たちの祖國が敗戰のとき決意したように、祖國を本當に平和をまもる國家として完全に獨立させ、〈アジアの孤兒〉となり、〈アジア人同志が相戰う〉というような悲劇をくりかえさぬために、私たちは、今こそ「中國に實現されつゝある新しい價値の實態を、私たちの立場で、自分の目で見きわめ」て、互に手をとりあわねばならぬ事態にまで追いつめられていると思う。

本書の著者たち――文學・思想・教育・歴史をそれぞれ專攻する人々――は、あの封建「中國がどのようにして新しいタイプの近代國家を形成することに成功したか、その過程で、どのような問題があり、それをどう解決したか、代表的な思想家たちが、何になやみ、何を支えとして生きたか、」「そのなやみに共感することを通じて中國を理解し、」しかも思想を「人間が生きるために不可欠のもの」として、「人間を人間たらしめるもの」として把握し、「そのような思想を追求することによって、人間の姿をつかむ」ことを課題とし方法とされる。この本はこのような觀點から、「アヘン戰爭から新中國」まで約百年間の苦難にみちた民族解放の歴史における思想の流れの內面法則を、いわゆる思想だけをとり出して問題にするのでなく、「生活とのからみあい」で、「生活の方から思想を照らすという方法をふくめて」、しかもこの國における「近代の異質性の究明」という點に焦點をあてゝ共同研究された成果である。したがって「百年間の中國の政治史をタテ糸とし、そこにさまざまな思想家(個人としても集團としても)の生き方をヨコに織りこんで」かゝれた本書は、單なる「思想史というより、思想の深みから眺めた革命史である」。おそらく今まで、「中國革命の思想」について、体系的に、このようなとりあげ方をした書物はなかったように思う。それだけにまた、「私たちの方法だけが、中國研究の方法ではない……さまざまな分野で、さまざまな方法をもって行われなければならない。ただ、これまでの日本の學問の性質からいって、こゝに取りあげた分野と方法が、比較的なおざりにされた、手薄なものであることは認めないわけにはいかない。私たちの未熟な研究が、いくらかでも役に立ち、そだちつゝある研究者を刺激することを期待する」という

う、遠慮ぶかい言葉からもうかがわれるように、思想史・革命史研究の上に多くの示唆と問題をなげかけている野心的労作ということができる。

以上のような問題意識から出發して、全体の叙述は、「まず最初に近代化がはじまる前の中國の姿を型として取り出し、そこから時代順を追って、過程を説明し、最後に、やはり型として未來像をえがく」という方法をとり、「清末時代」「五・四から國民革命へ」「國民革命から抗日戰爭へ」「抗日戰爭から人民共和國へ」という、近代史におけるピークをとらえた時代區分を中心として、四部から構成されている。

こゝでかんたんに内容をたどると、「清末時代」においては、清末封建社會とその文化がどのような行詰りをみせ、どのように解体しつゝあったかを、政治經濟・思想文化等の各方面から分析し、そのような社會のなかからおこった太平天國とその思想が、近代化への突破口となり、そこにえがかれた「ユートピア」は、後代、革新的な思想家たちに、有形・無形の影響を與えた。たとえば、康有爲の大同思想・孫文晩年の耕者有其田の理想がそうである。そして展開される洋務・變法を中心とする一連の改革運動は、所詮、支配階級の權力とイデオロギーの崩壞を阻止するために、「下からの改革の機運を、上からの改革によっておきかえよう」としたものである。そうした改革の限界性は、康有爲ら當事者の階級的性格と別個のものではない。彼の思想は、「中國の傳統的な學問にとって、コペルニクス的轉回であった」が「しかしいくら革新的でも、その革新は傳統のワクのなかでのことである」。このワクをつき破った太平天國に比すれば、その考え方は「生ぬるい」ときめつけている。

これを「全体の導入部分」として、「五・四から國民革命へ」の時期における文化人＝思想の複雜化する動向を、辛亥革命―五・四以後の、これまた複雜な政治史とのからみあいのなかで究明され、さらに「國民革命から抗日戰爭へ」の時期には、現實に生きる民衆たちのジグザグな過程を經てのたゝかいがつゞけられ、民族統一戰線の胎動するなかで、思想家・知識人がいかに混迷し、動揺と分裂を示したか、また中國共産黨が大衆に密着して民族解放をいかにたゝかったか、侵略と内戰下の思想闘爭を浮彫りされている。「抗日戰爭から人民共和國へ」では、「統一戰線の理論と實態を究めつゝ、毛澤東を中心とする「新民主々義文化の發展」を述べている。こうして現在、發展途上の苦難を克服しつゝ、「平和と建設を目ざして」前進する中國では、「民族の傳統をふまえて、あらたに民族に活路を開き、それによって世界文化に貢獻する」ような、新しい「人間像を形成するために、作家も、藝術家も、學者も、教師も、民衆と一体となって努力している」ことを指摘して、この本は結ばれている。

ところで全体を讀み通して、まず感ぜられることは、「現代中國の思想史の骨組み」が、現實の歴史的政治的背景をしっかりふまえて、注意深く、實にたくみに書かれていることは感心させられるが、しかしその割に迫眞的な感動性に乏しいということである。もちろん思想を對立相剋の姿で動的にとらえ、個別の思想の解説より思想闘爭に重きをおき、政治過程のなかで思想を生きたものとしてとらえようとされている努力は十分感じられるのだが。やはり共同研究ということが原因しているのであろうか。そうとすれば、たんに本書のみの問題ではなく、われわれ自身の問題として考えなければな

るまい。

第二は、本書に出てくる「中國革命の思想」の主体＝にない手が、どうもインテリ層や思想家たちであるということ。こうした人々が中國の近代化に果した役割は、決して小さく評價出來ない。が、「思想というもの」が「人間が生きるために不可欠のもの」とするならば、革命的エネルギーをもち行動した農民や勞働者たちの思想乃至意識こそ、「中國革命の思想」として究明すべきではなかったろうか。このような人々が封建的植民地的意識のなかからいかに脱却し、いかに變革されて、新しい思想にめざめていったのか、そしてその思想をいかに自分たちの生活のなかにまでとかしこんでいったのか、生活に根をおろしていった思想こそ、眞に新中國のイデオロギー的支柱となっているのではないか。封建的殘滓なお濃い日本という場において考えるとき、私は、民衆の生活の中から民衆の思想が照らし出されてないことを限りなく惜しいと思う。これがまた全体の迫力の弱さ、感銘の乏しさに關連してゆくのではなかろうか。

なお、抗日戰前夜に、封建文化のなかから民族の生存にすこしでも利益になるものを攝取して武器とし、一切の舊文化批判の基準を民族の生存に有益か有害かの一點において展開した思想運動、及び學問の大衆化の問題。クラスで成績のわるい生徒をどうするか。何によって人間の價値評定をするかの問題。等々、書かなければならぬことは多いが、こゝではすべて割愛しよう。たゞ最後に、著者たちはこの共同研究を通じて、「これからは學者たちのナグサミのための學問はやるまい、日本の革命の主力である勞働者が、それを血肉にすることのできる學問を志そう」と考えるようになったといわれているが、まことに貴重な体驗といわねばならない。たとえ、この書が著者たちの意圖を十分に發揮し得ぬものであり、わたくしたちが物足りなさを感じたとしても、こうした貴重な体驗のにじみ出た本書を讀まれる人々が、これを通じて日本の學界の封建性と、學問の在り方について、きびしい自己批判が生れるならば、それだけでも日本の學問にとって大きな前進といえよう。著者が期待されるように、本書を出發點としてよりすぐれた思想史・革命史が書かれるよう、私もまた期待しよう。

（横田　滋）

（カーブル通信　岩村忍氏より田村實造氏宛）

無事カーブルに到着、四月中旬奥地に出發のため準備中です。ハザラ蒙古人問題など仲々面白いことが多く、大いに樂んでおります。私の宿のボーイもハザラ人です。當地（アフガニスタン全体）ではペルシヤ語が共通語なので、目下毎日會話を勉強しています。ペシャワールでは、附近で發見されたウイグル蒙古文字の碑を見ましたが、拓本をとる用意がなく、殘念でした。またパンジャッブ大學では同大學の Mohammed Shafi 教授が編纂したラシード・エッディーンの書翰集を入手しました。四月中旬奥地に入り、五月下旬カーブルに歸り、再び七月一ぱい旅行し、八月中旬には歸國のつもりでおります。

三月三十日